

◆荒井類 選

《小林一茶の滑稽句》

ペーソスの句と明るいユーモアの句を、一句ずつ紹介したい。

うら長屋のつきあたりに住て

涼風の曲がりくねってきたりけり 小林一茶

信州に帰り住んでからの句というから、江戸にいたころの貧しい長屋暮らしを思い出して詠んだのだろう。長屋の奥まったところの自分の家には、涼しい風はそう簡単にはやってこない。あちらこちらを曲がりながら、ようやくわずかに吹き込むのみである。「曲がりくねってきたりけり」にペーソスのある滑稽味が感じられる。

猫の子が玉にとる也 ^{げがきいし}夏書石 小林一茶

『精選版 日本国語大辞典』には、〈【夏書】〔名〕（「げ」は「夏」の呉音）仏語。夏安居（げあんご）中、修行者、または志のある俗家の人が、経文を書写すること。また、その経文《季・夏》とある。

夏書石とは、「一字一石経」といって、小石のひとつひとつに一字ずつ経文を写したものだ。この小石に子猫がやってきて、これを手玉にとって遊んでいる、という景。かわいらしくユーモアの感じられる句である。

ペーソス…〔名〕（pathos）なんとなく身にせまってくるうら悲しい感じ。しんみりとした哀れさ。

（『精選版 日本国語大辞典』より）。

《一茶の時代の水洗トイレとウォシュレット》

^{ふるさと}古郷 ^{かはや}や ^{しり}廁の ^{しみづ}尻もわく 清水 小林一茶

「七番日記」文化九（一八一二）年、五十歳作。柏原は幕府領で中野陣屋の支配を受けていた。同七月は、本陣を務める中村観国方によく泊まっている。同八月七日には江戸へ出立しているのだから、初夏の頃の句会での作。句は、家の後ろの小川で用を足した後に、尻を清水できれいにしたよ、の意であろう。（「俳壇」2020年9月号、鈴木太郎「江戸俳諧博物誌」より）。

一八一二年の水洗トイレとウォシュレットを、小林一茶が俳句に詠んでいる！

なお、「ウォシュレット」はどこかの会社の登録商標であろうから、「お尻洗浄機能付き便座」とか「シャワートイレ」とか、適宜読み替えていただきたい。

《小林一茶の厳しい風刺》

露の世は露の世ながらさりながら 小林一茶

一茶は五十二歳で結婚し、五十六歳の時に長女を授かる。ところが、孫のように可愛い幼子を、翌年に病気で亡くしてしまう。この世は露のように儚く無常である。それはよく分かっているし、何度も自分にそう言い聞かせてみるが、そうは言っても幼い我が子を亡くした無念さ、哀しさはどうなるものでもない。

この句を滑稽俳句のひとつだというのではない。一茶は浄土真宗の門徒として、深い真宗理解の上に「露の世」を常套句としていたということをお願いなのだ。その上で、次の風刺性のある二句をご覧いただきたい。

世の中よでかい露から先(まづ)おつる 小林一茶

「露の世」ではあるが、世の中には大きなものと小さなものがある。二者が争えば大きなものが勝つことが多い。しかし一茶は、ここでその一般論を否定する。いざ落ちるとなれば、大きな露の方が先に落ちるというのだ。正岡子規が風刺の作品だと指摘した掲句における一茶の風刺は強いもの（権力者）にも容赦ない。

大(おお)み代(よ)や灯(とう)ろうを張る大納言 小林一茶

「大み代＝大御代」とは、く『名』（「おおみ」は接頭語）天皇が治められる世。天皇の御治世。聖代。〉（『精選版 日本国語大辞典』より）。その世にあって大納言という高い地位にあって、内職の灯籠張りをしなければやっていけない御治世であると皮肉っている。鋭い風刺である。

《説明の要らない滑稽俳句》

次の句の滑稽については、説明は要らないだろう。俳句のみを紹介する。

春風の日本に源氏物語	京極(きょうごく)杞(き)陽(よう)
秋風の日本に平家物語	〃
蠅とんでくるや箆笥の角よけて	〃
性格が八百屋お七でシクラメン	〃
南風吹くカレーライスに海と陸	權未知子
ゴキブリはもっとゴキブリ殖やしたい	千坂奇妙

(文中敬称略)